

森岡清美編『現代家族のライフサイクル』

培風館，1977年，266+8 ページ

本書は，森岡清美が『家族周期論』（培風館，1973）のなかで提示した理論を基底に据えながら9名の研究者が日本の諸社会集団のライフサイクル論を展開した共同研究の成果である。

本書の構成は，ライフサイクル概念の系譜および家族研究におけるライフサイクル研究の拡がり，その強みと弱み等について論じた序章ライフサイクルの概念とアプローチ（森岡論文）を筆頭にして，第Ⅰ編都市・夫婦家族のライフサイクルのなかには，川崎保健所の「婚前学級」の受講生を対象にして配偶者選択過程の分析を試みた第1章発達アプローチからみた配偶者選択（望月論文），東京家庭裁判所八王子支部の家庭紛争事件にあらわれた紛争夫婦の生活を生活関係レベル別周期段階レベル別に分析した第2章家族周期と紛争夫婦の生活（佐竹論文），総理府統計局「1973年家計調査」のうち一般世帯を除外し勤労者・核家族世帯で大学在学以下の子ども3人までの世帯と夫婦のみの世帯を対象にして再集計を行ない家計行動と家族周期段階との関連を分析した第3章家族周期と家計行動（岡田論文），家族の健康管理體系の中核部分である保健機能と家族周期段階ごとの役割構造の変化を解明した第4章家族周期と健康管理（島内論文），1970年と1975年の2時点比較を通じて5家族の社会的ネットワークとその変動過程を分析した第5章家族ネットワーク・家族周期・社会変動（野尻論文）が含まれている。第Ⅱ編農村・直系家族のライフサイクルには，戦後段階における農家出生力低下，農業経営規模および農業継承の発現形態との関連で農家のライフサイクルの多様化について論じた第6章農家のライフサイクルとその変化（森岡論文），岡山市高松市新池部落の調査に基づいて世帯形態の移行を農業経営，「株内」慣行等々との関連を含めて分析した第7章世帯形態の周期的移行と逸脱（柿崎論文），神奈川県奈良井・又野両部落を対象にして1965年と1975年の2時点10年間における世帯主宰権配分の変化の諸相について論じた第8章世帯主宰権からみたライフサイクルと家族変動（石原論文），福島県阿武隈地方の三和村，都路村，川内村の隠居慣行について比較分析をおこなった第9章家族周期からみた隠居慣行の動態（岡村論文）が含まれている。そして最後は，『家族周期論』刊行以降の家族周期研究の動向について紹介を試みた補論家族周期研究の最近段階（森岡論文）からなっている。

以上のように，本書は，実に様々な領域・地域を対象にしてライフサイクル・アプローチを試みているわけであるが，全体にわたって論じることは紙数の関係上できないので，評者が気づいた二，三の点について触れるにとどめておきたい。

まず，森岡論文は，前述のような視点に立って農家のライフサイクルを展望している点で注目しておきたい。次に，柿崎論文は，日本社会の全体的状況とムラの内部構造との関連をふまえて世帯形態の移行問題を論じている。この観点は，評者自身の今後の研究に役立てていきたいと考えている。さらに，石原論文は，現代日本の家族のあり方を規定するものとして制度（理念）的要因，人口学的要因，社会経済的要因の三つをあげている。この点は，人口研究者としても十分に検討しなければならないであろう。

最後に，今後の研究の展開について若干の注文をつけくわえておきたい。

それは，このグループの研究が対象領域の拡散にとどまることなく「現代日本のライフサイクル論」へと凝集することを切に願っているということである。

（清水 浩昭）